

説 教

聖日礼拝 北浜チャーチ
黒田 禎一郎

2017年1月15日（日）

主 題: 「きょう、という日に生きる」

ーその秘訣はどこにー

テキスト: ヘブル人への手紙3章12-15節

はじめに

- ・現代は「情報過多社会」と呼ばれます。その背景には、インターネットが大きく関与しています。確かにインターネットを通して、あらゆる種類の情報を得ることができる時代となりました。茶の間にいながら、またデスクに向かいながら、世界の情報が楽に入る時代となりました。半世紀前までは考えられませんでした。
- ・どのくらい便利になったかと言えば、クリックひとつで苦労もなく、貴重な情報が瞬時に入ることです。たとえば、私の神学校時代は聖書の専門用語の意味を調べることは、大切なレッスンでした。仮に聖書の「愛」という言葉を調べるには、図書館に行き、いろいろな書物を開きその意味を調べていました。すると新約聖書で使われている「愛」という言葉には、4つの異なる単語が分かりました。そしてそれを書き出し、自分のノートを作成していました。しかし今は、パソコンをクリックすると瞬時にその説明が表れます。実に便利な時代となりました。これは利点の方です。
- ・しかし、マイナス面もあります。正しい情報もありますが、間違った情報もあります。それに情報が多すぎることもあります。いったい、どれが正しいものか不明であることです。誤った情報を信じ受け入れたため、大損失した人もいます。昨秋の米国大統領選挙も、このインターネットのプラス面と、マイナス面の両方が動いたと言われます。ですから、聞きわけることは大切です。
- ・ところで、私たちの信仰生活においても、情報を聞きわける力は必要です。聞きわける力が欠しいならば、神の声なのか、悪魔の声なのか分からなくなり、とまどいます。私たちは皆、「きょう」という日を生きています。そこで大切なことは、声を聞き分けることです。その秘密はどこにあるのでしょうか。
- ・前回、主は私たちに「きょう、もし御声を聞くならば、心をかたくなにすることはしない」とお語りくださいました。つづいて、「きょう、という日に生きる」というテーマで、主の御声を聞きたいと思います。2点

大切なポイント**1. 聞きわける力を養いなさい**

- ・「きょう」という日を生きるために、何が必要でしょうか？
それは、神のみことばを聞くことから始まります。神のことばは「然りであり、アーメ

ン」です。確か神のことばには、声を聞き分ける力があります。

4:12 神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。 ヘブル

1) 聖霊の助けによって読む

- イスラエルの民が荒野をさまよった40年間、彼らが聞いた声は、人の声でなければ、神からの声か、悪魔からの声でした。彼らにはそれを聞き分けることが求められました。神の声を聞きわけするには、神のことばである聖書を読んでいなければなりません。みことばを読む時に大切なことは、聖霊の助けによって読むことです。
- そうでなければ、聖書を研究してやろうという態度になり、多くの知識を得れば得るほど傲慢になりかねません。結果、ほかの人をその聖書知識によって裁いたりしかねません。
- では、聖霊の助けによって読むとは、どういう読みでしょうか。それは、聖霊によって学んだみことばを、自分に適用することです。日ごろから聖書を読み、みことばに立つ信仰生活をしていれば、何かが聞こえてきた時、それが神の声なのか、それとも悪魔の声なのか分かるのです。
- 私は「何かが聞こえてきた時」と、言いました。しかし必ずしも、耳に直接聞こえてくる声を言っているわけではありません。(もちろん、直接神の声を聞いたと言う方もおられますから、私は否定はしません。)しかし神の声は、これをしようかなという思いに働かれる場合もあります。あそこへ行きたいという願いに働かれる場合もあります。つまり、神のみことばを読む時、自分を何かの行動に駆り立てるもののことを言っています。

4:12 神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。 ヘブル

2) 心に留めるべき警告

- イスラエルの民は、荒野を旅している間、何度も神の声を聞きました。しかし、ほとんどの場合、失敗しました。それは彼らが神から離れていたからです。荒野では、食べ物や水が欠乏しました。その度、彼らはエジプト時代を思い出しました。そしてエジプトから救い出してくださった神は、本当の神なのだろうか、疑い、神を試して、その証拠を求めました。心が神から離れると、少し苦しい事態が起こってくると、音をあげてしまいます。
- 歴史はそこから学ばない限り、繰り返します。今日でも、多くのクリスチャンが、少しの試練に遭うと根をあげてしまうのは、教訓から学び、神に堅く結ばれてないからです。「神はどうして、こんな目に遭わせるのだろうか」と言い、不平不満が「つぶやき」となって口から出てきます。神から離れているからです。神がよく分っていないからです。私たちをお救いくださった神がよく分かれば、ちょっとやそつとで、神を疑ったりしなくなるはずで

- ・神を疑うとは、神と自分がぴったり合っていないので、そこに隙間があるからです。隙間のあるような信仰生活をしていたら、神の声を聞いた時、心をかたくなにし、神への疑いを抱くようになることは当然でしょう。ですから、聞きわけの力を養うために、イスラエルの歴史から学ぶことは、自分の生き方を吟味することになります。聖書はこの奥義を教えてください。そしてもうひとつ、大切なことがあります。

2. 互いに励まし合いなさい

- ・私たちは、イスラエルの歴史の教訓から学ぶことは大切です。ヘブル人への手紙の著者は、「きょう」という日を生きるために、次のように語りました。

3:13 「きょう。」とされている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。

1) 一人ぼっちの信仰生活はない

- ・信仰生活では、信仰の仲間が必要です。最も良い信仰の仲間は教会の中にいます。教会は霊的な家庭です。そこでこそ、信仰は健全に育っていきます。人が健全に育つためには、家庭が必要です。もし崩壊家庭で子どもが育つならば、家庭から受ける影響は大きなものです。霊的家庭である教会に根付かないで信仰生活をしている人は、健全な信仰生活が難しく、独りよがりのクリスチャンになりやすいものです。
- ・兄弟姉妹が互いに励まし合うことによって、健全に信仰生活をしていくことができます。ですから他の兄弟姉妹からの励ましを受け入れる、柔らかい心が必要です。「心をかたくなにする」とは、心開かず閉ざす状態のことです。しかし第一義的には、神に心をかたくなに閉ざすことです。そして第二に、兄弟姉妹の助言や忠告にも心を閉ざすことです。ですから神に結び付いている人は、兄弟姉妹に対しても、柔軟な心を持っている人であると言えるでしょう。 [第一テサロニケ人への手紙](#)
- ・5:11 ですから、あなたがたは、今しているとおり、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。

このみことばは2つのことを教えています。

① 互いに励まし合う

- ・私たちは何によって、励ましを受けるでしょうか。それはみことばの真理にふれてです。神のみことばは、「きょう」も生きています。そこに神のわざが現れ、励ましと勇気が与えられ、証しが生まれます。それが私たちにとって、互いに励ましとなります。

② 互いに徳を高め合う

- ・私たちが互いに徳を高め合うならば、それは成長につながることになります。互いの徳を高め合うとは、どういうことでしょうか？
「徳」(“oikodomeo”: オイコドメオ)とは、建て上げるという意味があります。家や塔や町を建て上げるという意味です。

私たちは日常生活において、人の否定的な側面を見易いものです(自分のこと

は横に置いて)。徳を高めるとは、不必要な言葉を発しないで、人のプラスになることを発することです。

- 考えてみれば、世の中の流れとは逆方向ですね。しかし、その逆説に真理があるのです。世の中は、人の欠点、弱点について自分に有利な状態へ導こうとします。ですから争いは、絶えることはありません。聖書は「互いに徳を高め合いなさい」と勧めていることに注目してください。

2) 「最初の確信」を保ちなさい

- **3:14** もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、私たちは、キリストにあずかる者となるのです。

次に「きょう」生きるために大切なことは、イエス・キリストを信じた時の確信を、しっかりと持ち続けることです。救いは、ひとつの信念のようなものと考える人がいます。確信とは救いの確信のことです。イエス・キリストを信じた時に、聖書は救われると教えています。ヨハネ福音書

6:47 まことに、まことに、あなたがたに告げます。信じる者は永遠のいのちを持ちます。

- ですから、決して感情の高まりや意志の強さではなく、神のみことばが約束していることに目を止めてください。神のみことばによって裏付けられた、救いの確信が大切です。ヨハネは次のように言いました。第一ヨハネの手紙

5:13 私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。

- すなわち、ヨハネは救われていることは認識できると言いました。そしてその救いの確信を持ちつづけるならば、私たちは御国の祝福にあずかることができるのです。第二ペテロの手紙

1:11 このようにあなたがたは、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の御国にはいる恵みを豊かに加えられるのです。

- もう一度、旧約聖書時代のイスラエルの民を思い出してください。彼らはエジプトから救い出され、約束の地へ向かって旅をしました。彼らはエジプトの奴隷生活から救出され、荒野を旅して、約束の地へ向かいました。しかし、彼らは神の御声に心をかたくなにし、神に逆らいました。
- 出エジプトの時に成人していた人は、ヨシュアとカレブを除いて、全員荒野で死んでしまい、約束の地に入ることはできませんでした。イスラエルの民約200万人を率いた、あの指導者モーセでさえネボ山まででした。約束の地へ入ることが許されませんでした。(民数記20章2～13節参照)
- このことは、今日のクリスチャンにとって教訓として教えられます。イスラエルの民は地上の約束の地カナンでしたが、私たちの約束の地は天の御国です。すなわちイスラエルの民に与えられた地カナンは、本当の約束の地、安息の地である天

の御国を示しています。

- ・イスラエルの民も、信仰を持ち続けたならば、約束の地へ全員入ることができましたが、ヨシュアとカレブ以外は全員入ることができませんでした。入ることができた人々は、出エジプトの時に成人していなかった子どもや、40年間の荒野生活で生まれ、成人した人たちでした。
- ・もしも、出エジプトした時の成人たちが信仰を持ち続けていたら、全員入ることができました。そうならなかったのは、神への不信仰が原因でした。私達も同じです。ヘブル人への手紙の著者は言いました。
 - ・3:14 **もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、私達は、キリストにあずかる者となるのです。**

私達はイスラエルの民の出来事を教訓として、神から離れることがないよう願います。聖書は私達に次のように勧めています。

- ・3:15 **「きょう、もし御声を聞くならば、御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにすることはならない。」**

「きょう」とは、第一義的に教会時代、恵みの時代を指しているでしょう。第二義的には、毎日迎える「きょう」です。すなわち、私達は「きょう」(1月15日)をどのように過ごすでしょうか。歴史の教訓からどれほど、学んでいるでしょうか。歴史はそこから学ばない限り、繰り返します。聖霊の助けによって、情報を聞き分け、神のみことばを学んでいるでしょうか。自問自答してみようではありませんか。

ま と め

主 題: 「きょう、という日に生きる」

—その秘訣はどこに—

- ・私達は、「きょう、という日に生きる」というテーマで、御声を聞きました。「きょう」という日は、たいへん貴重です。逆戻りがないからです。私達は、神から与えられた祝福の約束を、無駄にしないためにどうすればよいでしょうか。
 - ① みことばに基づいた「**救いの確信**」を持ちつづけること
 - ② みことばを聖霊の助けによって、自分の生活に「**適用**」すること
- ・そうすれば、何かが聞こえてきても、それが神からの声か、それとも悪魔からの声かを、聞き分けることができます。

* God bless you!